

道風

道風記念館だより

第75号

発行日
令和七年五月三十一日

編集・発行

春日井市道風記念館

春日井市松河戸町五―九―三

電話(〇五六八)八二―六一〇

収蔵品紹介 亀田鵬斎書幅

一幅・江戸時代

亀田鵬斎(一七五二〜一八二六)は江戸時代の儒学者です。書にも秀で、その書風は細く息のながい曲線を駆使した独特のもので、中国、唐代の懷素の影響を受けたといわれます。懷素といえは狂草の名手。狂草とは、文字どおり「狂った草」の意です。草とは「草書」のこと。草書は漢字をはやく書くために画を省略したりつづけたりして

できた書体です。

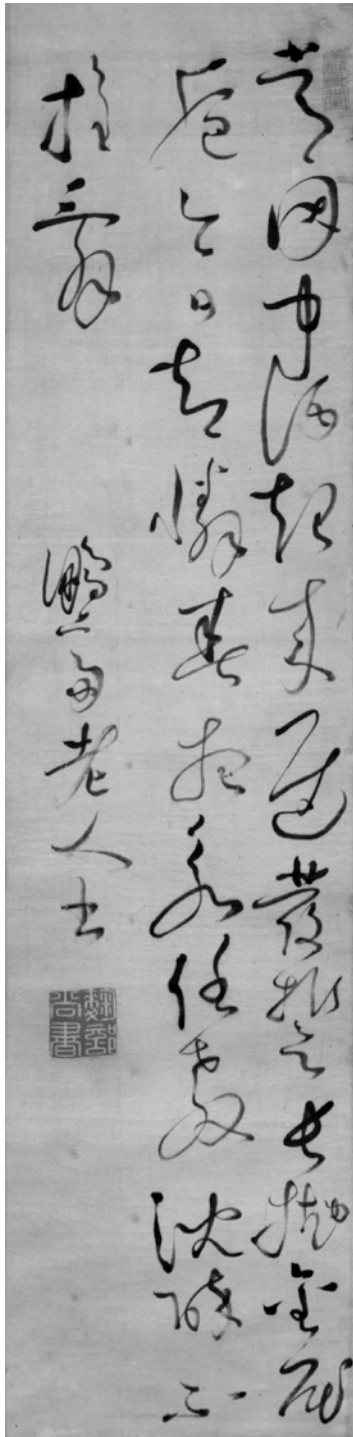
本作品も、懷素の狂草さながらに亀田鵬斎によつて揮われたもの。狂ったように書いた草書ですから、当然読みにくいのですが、すばやくよどみなく、抜群のバランス感覚をもつて引かれた書線が第一の魅力です。

自作の詩を書いています。

常因中酒起来遅 発誓長抛金屈厄

今日知憐春夜永 任教沈醉不推辞

常に中酒ちゅうしゅに因よつて起き来きたること遅おそし 金かね



屈厄くつゑを長く抛なたんと発誓はつせいす 今日春夜永けふしゅんやえいき
ことの憐れんれを知る 任教にんぎょう沈醉しんすいして推辞すいじせず

(酒を飲みすぎて、毎朝はやく起きられない。しばらく酒をやめよう。しかし断酒を誓ってみて気付いた。今日の春の夜はなんとつづくしいことだろう。ええい。こんな夜は飲まずにおられまい！)

この作品も、お酒を飲みながら書かれたのかもしれない。縦八九・二センチ、横二二・七センチと小ぶりですが、飄々と旋回する筆致からか、存

在感ざいかんがあり、大きな作品と思わせる、魅力ある書です。

現在開催中の
展覧会、館蔵品
展「一回性の美
学」で七月十三
日(日)まで展
示しています。

漢代の竹簡『論語』

福田 哲之

現在開催中の大阪・関西万博の中国パビリオンは、古代の竹簡の書物（竹書）を広げた形をモチーフにした斬新なデザインが話題となつています。中国古代の書物に竹簡が用いられたことは、近年広く知られるようになりました。とは言え、紙の書物になじんだ私たちには、なかなか具体的にイメージしにくいところがあるようです。今回は中国の代表的な古典である『論語』を取り上げ、出土した実物資料を参考にしながら、竹簡に書かれた古代の書物の姿を想像してみたいと思います。

一九七〇年代以降、大量の簡牘資料が出土し、竹簡に書かれた戦国から秦・漢時代の書物の実態もかなり明らかになってきました。現在のところまとまって出土した竹簡『論語』の資料は、

- ・定州漢墓竹簡『論語』（定州本・図1）
- ・平壤貞柏洞三六四号墓竹簡『論語』（平壤本）
- ・海昏侯墓竹簡『論語』（海昏本）

の三つが知られています。定州本は、一九七三年に河北省定州市の中山懷王劉脩の墓から出土した竹書で、劉脩の没年である五鳳三年（前五五）以前の書写と推定されています。前漢末頃に盗掘されて火災に遭ったため、出土した竹簡は散乱・炭化して塊状になり、大部分が残簡という深刻な状態でした。その上、一九七六年の唐山大地震によって竹簡の一部が損壊する事故に見舞われましたが、研究者の尽力に

よって整理が進められ、一九九七年に全簡の釈文が公表されました。『論語』の竹簡は六二〇枚余り、字数は七五七六字で、現行本（およそ二万六〇〇〇字）の二分の一に満たない分量ですが、対応する本文は現行本の二〇篇（学而篇、堯曰篇）すべてにわたります。

平壤本は、一九九〇年代のはじめ頃に北朝鮮の平壤市楽浪区域にある貞柏洞三六四号墓から出土した竹書です。竹簡はその後失われたようですが、出土直後の撮影とみられる二枚の写真が残されています。同出の「楽浪郡初元四年県別戸口簿」木牘の分析から、墓主は楽浪郡府の属吏で、該墓は木牘の紀年である初元四年（前四五）から遠くない時期に造営され、平壤本書写の下限もその頃と見なされています。出土した竹簡は現行本の先進篇・顔淵篇のいずれかに属し、推定総数は一二〇枚前後、そのうち確認される竹簡は四四枚（完簡三九枚・残簡五枚）、字数は七五六字で、現行本のおよそ二〇分の一に満たない分量です。

海昏本は、二〇一五年に江西省南昌市の海昏侯劉賀の墓から出土した竹書で、劉賀の没年である神爵三年（前五九）以前の書写と推定されています。全容はまだ公表されておらず、概要と初步的研究が発表されたにとどまります。それによれば『論語』の竹簡は五〇〇枚余り、大部分は残簡として完全な簡は少なく、釈読可能な文字は現行本のおよそ三分の一で、残存する文字が比較的多い篇は、公冶長篇、雍也篇、先進篇、子路篇、憲問篇などがあり、すでに散逸した知悼篇の残簡も含まれています。

このように三つのテキストの書写年代の下限は、

いずれも前漢後期と見なされますが、残存する本文が限定され、章や篇などの編成についての情報も断片的であるため、現時点では漢代の竹簡『論語』の全体像を把握することは困難です。

ただし本文が公表されている定州本・平壤本と現行本とを比較すると、少なからぬ文字の異同が認められるものの、その多くは通假字や助字にかかわるものであり、漢代の『論語』と現行本とはかなり近い系統の本文であったことをうかがえます。また全体の篇数も不明ですが、定州本の残存本文が現行本二〇篇のいずれかの本文と対応する点、後述するように海昏本にみえる篇題（篇のタイトル）が現行本の篇名とほぼ一致する点などから、現行本の二〇篇と漢代のテキストとの間には緊密なつながりが想定されます。

こうした状況を踏まえ、以下では現時点におけるひとつの試みとして、三つの竹簡『論語』から得られるデータにもとづき、不足する部分を現行本で補うことによって、当時の姿を再現してみましよう。

まず一簡の長さ・幅・字数、竹簡を編綴する綴じひもの数です。

定州本は、簡長一六・二センチ、幅〇・七センチ、字数は一九〇二字、綴じひものは三本（上・中・下）です。

平壤本は写真のみが伝わるため、簡長や幅などの数値は知られませんが、字数は一八〇二字、綴じひものは三本です。

海昏本の簡長や幅などの数値は、未だ明らかにされていないようですが、江西省文物考古研究所等「南昌西漢海昏侯墓」（『考古』二〇一六年第

令和6年度 事業報告

展覧会

■ 1階展示室

企画展「道風記念館所蔵 現代の書優品展」

4月26日～7月15日

- ・館蔵の現代書作品のなかから、特に優品を選んで展示。
- ・学芸員による展示品解説 5月11日・6月9日

企画展「おののとうふう～中国の書と和様の書～」

7月20日～9月1日

- ・子どもにもわかりやすく小野道風を紹介。
- ・ワークショップ「はじめてのふで」「秘密の特訓」「道風くん
にチャレンジ!」を実施。

特別展「岡寺版集帖」

9月6日～10月14日

- ・三重県継松寺所蔵の岡寺版集帖を中心に日本の集帖を展示。
- ・講演会「岡寺版集帖と韓天寿」9月29日 講師 伊藤滋氏

館蔵品展「半切という紙面」

10月19日～12月15日

- ・館蔵品のなかから半切の作品を展示。
- ・学芸員による展示品解説 11月10日・11月30日

館蔵品展「書の魅力」

12月18日～2月16日

- ・様々な魅力をもつ館蔵の書作品を展示し、書の鑑賞方法を提案。
- ・学芸員による展示品解説 1月26日・2月8日

館蔵品展「小さきものはみな愛し^{うつく}一懐紙・短冊・扇面・小品一」
2月21日～4月20日

- ・館蔵の近現代書作品のなかから、小さくかわいらしい書を紹介。
- ・学芸員による展示品解説 3月2日・4月12日

■ 2階展示室

「第89回県下児童生徒席上揮毫大会作品展」

12月18日～1月8日

「第43回道風の書臨書作品展」

1月18日～2月2日

講座

「源氏物語絵巻の魅力にせまる」

6月～7月(4回)

- ・書、料紙、内容など、様々な角度から鑑賞する源氏物語絵巻の講座。
- 講師 四辻秀紀氏

「書にふれる、はじめての講座」

2月～3月(6回)

- ・書にふれたことのないほどの初心者に向けた実技と鑑賞の講座。
- 講師 橋詰桃邨氏

「伝藤原行成筆重之集をかく」

2月～3月(4回)

- ・重之集を題材とした臨書実技講座。
- 講師 馬場紀行氏

展覧会案内

企画展「おののとうふう～小野一族のひみつ～」

小野道風(894～966)は、平安時代中期を代表する能書(書の上手な人)です。道風の日本書道史上における功績を一口で言えば、従来の中国の書の模倣から脱して、日本風の書を創造したことです。その優美な書は和様の書と呼ばれ、後世に大きな影響を与えました。

今回の企画展では、遣隋使として中国へ渡った小野妹子や、漢詩文に長けた小野篁、和歌にすぐれた小野小町など、道風の一族にもスポットをあてつつ、子どもにもわかりやすいよう、小野道風とその書を丁寧にご紹介します。柳と蛙の逸話にもみられる努力の尊さ、古きを学び、それを活かして新しい書を生み出した道風の革新的な精神に触れていただきたいと思います。

- ◆ 会 期 令和7年7月18日(金)～8月31日(日)
- ◆ 観覧料 一般 100円、高校・大学生 50円、
中学生以下とその保護者無料
- ◆ 休館日 月曜日(祝休日の場合は翌平日)

